

# ピーマン編



## 1. 苗選び

以下の点に注意しましょう。



- ・茎が太く、しっかりしていて、節の間隔があまり長くない
- ・子葉がきちんと残っている
- ・葉が緑色でつやがある
- ・病害虫がない

## 2. 植え付け

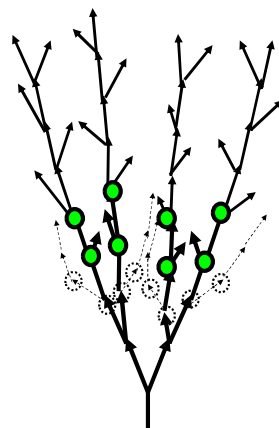


地ぎわに病害が入りやすいので、鉢土がわずかに隠れるくらいの浅植えにして、早めに支柱を立てましょう。

定植の1週間前までに、1m<sup>2</sup>あたり市販の野菜用化成肥料(窒素8～10%で緩効性)250～300g、苦土石灰130～150g、完熟堆肥3～5kg加えて、20cm位の深さまでよく混ぜましょう。



## 3. 手入れと仕立て方



第2分枝の4本を主枝にします。

第3分枝の内枝は取り除きましょう。

第4分枝以降の側枝は、2節目で強い方を折り取りましょう。

## 4. 追肥と灌水



追肥は、化成肥料を週に1回、1株当たり窒素成分で1gくらい与えましょう。



草丈が1mくらいになると、1株1日当たり3ℓ程度の水が必要になるので、雨を待たずに、こまめに灌水を行いましょう。

## 5. 収穫



株を疲れさせないように、果実の重さが30gほどになったら、早めに収穫しましょう。

## &lt;栽培の流れと要点&gt;

(品種や栽培地域によって異なりますので、詳細につきましては園研までお問い合わせください。)

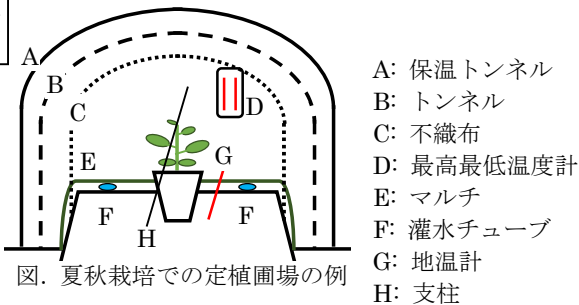
## 圃場の準備

定植圃場の土壌分析・診断

①適正な施肥と水分

②定植圃場の地温は18℃以上  
鉢土が1cm出るくらいの浅植で定植

地温の確保



## 苗の準備

## 育苗の準備

床土、鉢土準備  
地温計・最高最低温度計の設置  
病虫害予防で除草

## 播種

発芽温度は28~30℃  
移植前2日間は25~27℃  
発芽不良は低温・高温・水分過剰が原因

## 移植

移植時の地温は25℃

※アブラムシ・スリップス・コナジラミ・  
チャノホコリダニ等の防除を行います。

## 圃場での作業

## 圃場への定植

ストレスなく活着させましょう！

## 4本仕立て準備

③枝が6~8本出て着果してからの  
主枝作りは遅いです。

## 摘蕾・摘果

④1, 2分枝は摘蕾, 初期生育が良くなければ3分枝も摘蕾します。

## 吊り上げ

⑤V字に吊り上げます。吊り遅れに注意しましょう。

## 収穫・整枝

⑥収穫が最大の手入れです。  
整枝遅れ, 垂れ枝は減収になります。

## 追肥・手入れ

⑦1t/10a 収穫毎にNで3kgの追肥が目安です。  
夏場は0.5t/10a 収穫毎に1.5kg等, 水分補給も兼ねて回数多く実施します。

## 片づけ

土壌診断用のサンプル採取し, 次作に備えましょう。  
土壌病虫害(センチュウ等)が見られた場合, 次作に備えて対策を行いましょう。

## 栽培終了

## その他の注意事項

・尻腐果発生対策に灌水・畝間散水をこまめに行います。

・ピーマンの着果には, 開花時のハウス内の温度は18~27℃, 湿度は80~90%が適しています。  
・管理温度は16℃~30℃を目標にします。・低温、乾燥で細長い果実が多くなります。  
・33℃を超える高温では落果や石実が多くなります。

・スリップス・コナジラミ等の害虫対策で天敵利用, または早期の薬剤散布, 湿度が高いと病気の発生率が高くなりますので予防の薬剤散布を行います(産地基準で)。



## ①適正な施肥と水分

### 1. 定植地の注意点

- ・前年にナスが栽培されていたところは、半身萎ちょう病などが発病しやすいので避けます。
- ・前年にシシトウ、トウガラシが栽培され、モザイク病の発生があったところは避けます。

### 2. 仕立て、栽植密度

- ・1条4本V字仕立て、畦間 200cm × 株間 50cm , 10 アール当たり 1,000 株を標準とします。
- ・2条2本V字仕立て、100cm × 50cm , 10 アール当たり 2,000 株で草勢が安定します。

### 3. 施肥（下記の施肥量数字は基本成分量ですので、各圃場の土壌検査結果に応じて施用する）

- ・堆肥が不足していると、尻腐れ果の発生が多くなります。4～6t / 10 アールは必要です。
- ・土壌分析、土質にあわせた施肥が必要です。10 アール当たりの元肥として、苦土石灰：150kg、窒素：12～20kg、リン酸：15～30kg、カリ：12～20kg を施用します。生育期間が長いことから、肥効調節型肥料を組合せる場合は、窒素：30～40kg、リン酸：20～40kg、カリ：20～30kg くらいとなります。

### 4. マルチフィルム

- ・3～4 月定植で**ダークグリーンマルチ**は地温上昇、雑草抑制、初期の生育に大きな効果があります。

### 5. ハウスフィルム、トンネル（使用する資材に応じた管理をする）

- ・フィルムの扱いやすさから、POフィルムを張っているハウスが多くなっています。塩化ビニルハウスに比べて、やや低温、低湿度で推移し、小葉短節間となり、果実肥大が遅くなり、草勢が弱くなります。通路散水などで、温湿度に注意してきめ細かく管理する必要があります。

### 6. 適正水分の確保

- ・定植圃場の適正な水分量は土質により異なるので、圃場の状態把握に努める。



図. 水分過多による根の障害と黄化。



図. 左側斜面からの余剰水による根腐れ

## ②定植圃場の地温は 18℃以上

### 1. 定植苗の大きさ

- ・開花直前苗の定植よりも、若苗定植の収量が優れています。
- ・若苗定植で適正管理な圃場は、根張り、草勢が安定して、生産量が安定しています。

### 2. 定植

- ・定植準備を早めて、地温を上げ、**18℃以上**を確保する。
- ・鉢土が 1cm 出るくらいの浅植え（土際部病気リスク軽減）。
- ・仮支柱を立てます。
- ・畦土と鉢土がなじむよう灌水します。
- ・状況次第では通路散水も考慮してください。

支柱  
根鉢が出るように定植

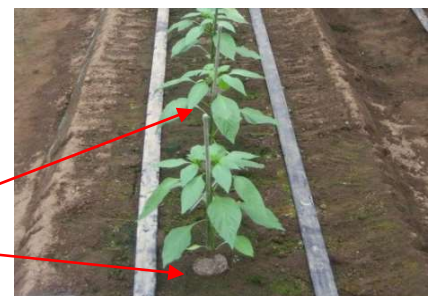


図. 定植 10 日後

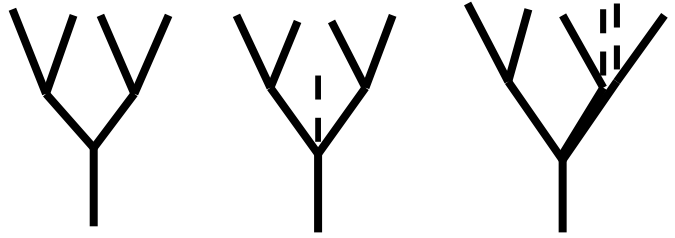
### 3. 温度管理

- ・栽培中適温は 20～28℃で、定植直後は 33℃換気とすることで地温が上がり、この地温で夜のトンネル内気温も保たれることから、初期からの生育、収量が良くなります。

### ③ 4本仕立て準備（ハウス栽培は2～4本仕立てが基本です）

- ・枝が6～8本出て着果してから主枝作りすると、枝が細くなり垂れ下がり、着果数多く生育が弱くなります。分枝の上10cmくらいに伸びた頃、第1分枝で2本、第2分枝で4本にします。2本が帯になった場合は、第2分枝で4本にします（右側の図）。

早めに4本仕立ての準備をする  
点線部は10～15cmで摘除する



### ④ 摘蕾・摘果

- ・同化量の半分以上が果実の肥大に使われるため、着果すると株の勢い、特に根の伸びが抑えられます。
- ・低温期は肥大が遅く、株が大きくなりません。
- ・1, 2分枝は摘蕾して初期から株作りした方が果実の肥大が早く、芯止まりしにくくなります。初期生育の悪い時は、3分枝も摘蕾した方が、休み無い収穫ができます。



図. 1,2,3 分枝摘蕾

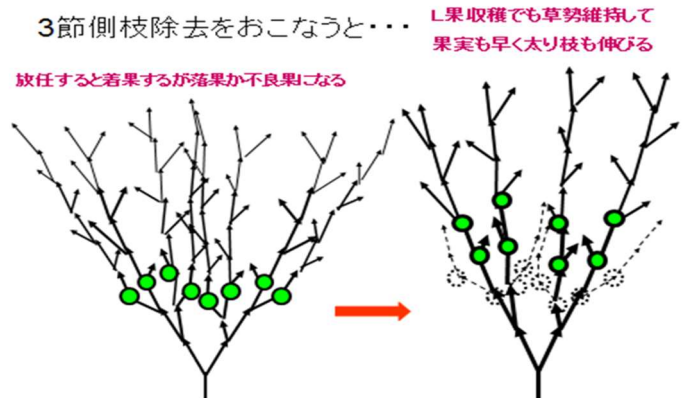


図. 1,2 分枝摘花

#### 3節側枝の除去

（右図は除去イメージ）

3分枝側枝を摘除すると、4, 5分枝側枝が強くなり立ち、良果が数多く着果します。しかし、次の大きな谷の原因ともなります。この側枝を2節で整枝し、主枝生育を保ち安定出荷の草姿を作ります。（主枝 1 果・側枝 1～2 果）



第1分枝下の側枝は15cmを目安に摘除し、葉も元気なら残します。  
小さい側枝が無くなると根と草勢が弱くなります。



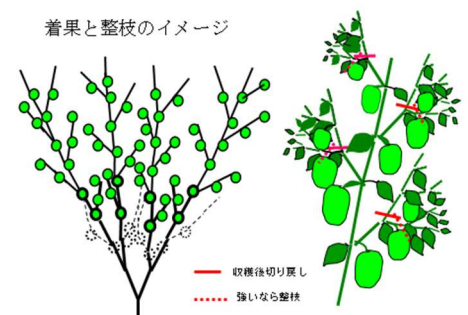
図. 3節側枝除去前



図. 3節除去後誘引した草姿

### <収穫しながら手入れ>

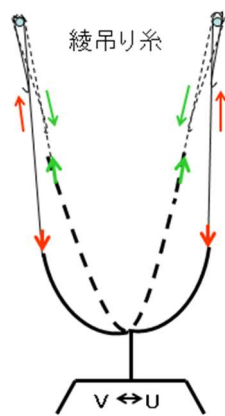
- ・各側枝に2果着果させ、収穫後、1節に切り戻す。側枝が強いと、良果が数果着き、生育が弱るので強い側枝は果実肥大前に2, 3節で整枝する。垂れ枝ができてしまう整枝は収量が激減し病気も発生しやすい。





## ⑤吊り上げ

- ・ハウスではV字に吊り上げます。枝が開くと、一斉に着果し、肥大が悪く、草勢が止まり、枝が細くなり、垂れ下がります。回復させるには、多くの果実を摘果する決断が必要です。



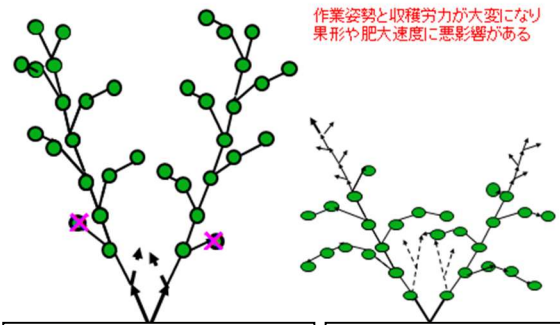
草勢弱くするには

結び目上げる ↑  
糸がゆるむ  
主枝が倒れる

草勢強くするには

結び目下げる ↓  
糸が張る  
主枝が立つ

垂れ枝は作らない



作業姿勢と収穫労力が大変になり  
果形や肥大速度に悪影響がある

適正着果数で枝が太く立って  
いれば果実肥大が良い

着果が多く枝垂れると変形果  
になり肥大悪い



図. 吊り上げた状態



図. 一斉着果でこの後収量が減少

## ⑥収穫・整枝

- ・L果は、臭い、苦みが少なくなり、内容成分高く、店持ちも良くなります。L果の比率が増えるほど、収量の山谷が大きくなり、トン単位で減収となりますので、摘果やS果収穫して、草勢を回復させます。
- ・枝の混んだ所は、着果しても不良果が多くなります。垂れ枝は果実肥大が遅く、奇形果が多くなり、株の勢いを弱めます。このような枝は、1, 2節で摘果を兼ねて早めに整枝します。整枝すると次の芽が出て、良果が着いてきます。
- ・収穫や薬剤散布の労力、効率を考えて摘芯位置を下げます。主枝は、1.2m くらいの高さで摘芯します。強めの側枝を主枝にして巻き上げ 1.5m くらいでまた摘芯します。草丈は作業者の頭の高さくらいを目標とします。頭の上でやぶにしても収量はあまり変わりません。

## ⑦追肥・手入れ

- ・収穫が始まると管理の中心は、収穫、灌水、手入れで（病虫害防除も含みます）、特に畦内の一部や通路が乾いていると、施用した肥料が利かないので適時灌水を実施します。
- ・芯止まり気味、草勢が弱ったら追肥とすぐ考えてしまいがちですが、着果負担が原因で株の勢いが無くなっていることが多くあります。肥料不足なら追肥は当然ですが、肥料があるのに追肥では、濃度障害、尻腐れ果の発生が多くなります。この場合は、追肥よりもS果収穫や整枝、摘果が必要です。
- ・追肥量の目安は、10a 当たり 1 トン収穫したら、窒素成分で 3kg とします。夏場は土壌が乾くと障害果が発生しやすくなり、500kg 収穫したら、1.5kg と量を減らして回数を多く灌水追肥します。